

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 今村 純子

論文題目 「シモーヌ・ヴェイユの詩学」

論文審査委員 鵜飼 哲教授、藤野 寛教授、平子 友長教授

1 本論文の構成

本論文は20世紀フランスの思想家シモーヌ・ヴェイユの著作を主として哲学的観点から、善と美の関連を軸に検討したものであり、同時に美学、倫理学、労働論、宗教論、映画論、比較思想史などにまたがる領域横断的な研究である。

本論文は次の各章から構成される。

目次

まえがき

略記号一覧

第一部 労働と詩

第一章 プラトニズムと現代

一 自覚について

二 痛みが美に変わるとき

三 善への転回

四 力を打ち砕く愛

第二章 「デカルトにおける科学と知覚」をどう読むのか

一 知覚と自由

二 純化された想像力

三 「何」が「私」であるのか—労働と存在論

第三章 詩学の可能性

一 詩と自覚

- 二 「真空」の経験
- 三 「身体性の原理」と詩
- 四 詩学がひらく人間学

第四章 ケース・スタディ 1 映画『女と男のいる舗道』をめぐって—瞬間の形而上学

- 一 「私」が「私」で「ある」ということ
- 二 第二の誕生
- 三 本質と属性
- 四 「現象としての死」と「本質としての死」
- 五 言葉と欲望

第二部 美とは何か

第五章 美と神秘—感性による必然性への同意

- 一 認識と距離
- 二 不幸と美—「目的なき合目的性 (finalité sans fin)」の射程
- 三 世界の美と世界の秩序
- 四 藝術論における救い

第六章 美と実在—シモーヌ・ヴェイユと西田幾太郎「場所的論理と宗教的世界観」

- 一 距離があること、距離がないこと
- 二 「真空」と「絶対無」
- 三 「弱さの強さ」と美
- 四 藝術と超越

第七章 「詩」をもつこと—シモーヌ・ヴェイユと鈴木大拙

- 一 シモーヌ・ヴェイユにおける「東洋的なるもの」
- 二 「純粹なるもの」との接触
- 三 「詩」と詩的言語の可能性

第八章 ケース・スタディ 2 映画『千と千尋の神隠し』をめぐって—アニメーションの詩学

- 一 アニメーションがひらく倫理

- 二 見えるものと見えないもの
- 三 欲望と愛
- 四 恩寵と優しさ

第三部 善への欲望

第九章 愛について

- 一 媒介としての「愛」—マルクスからプラトンへ
- 二 善と必然の矛盾をどう生きるのか
- 三 数学—知と愛の合一

第一〇章 脱創造あるいは超越論的感性論

- 一 「脱創造」とは何か—〈愛の神〉の似姿
- 二 「超越論的感性論」のゆくえ
- 三 シモーヌ・ヴェイユによるニヒリズムの超克

第十一章 ケース・スタディ 3 映画『ライフ・イズ・ビューティフル』をめぐって—善への欲望

- 一 動機の問題
- 二 善意志と「善への欲望」
- 三 恩寵と自由の問題
- 四 「リアリティ」とは何か

第四部 藝術と倫理

第一二章 表現について

- 一 見えない世界の確かさ
- 二 表現と倫理
- 三 美的感情
- 四 表現と藝術

第一三章 藝術創造と生の創造

- 一 生の創造における「労働と藝術」
- 二 想像力の問題
- 三 重力と恩寵

第一四章 藝術という技、労働という技—シモーヌ・ヴェイユと西田幾太郎『善の研究』

- 一 表現と形式
- 二 ポイエーシスとプラクティス
- 三 その倫理性

第一五章 ケース・スタディ 4 映画『アメリ』をめぐって—見える世界と見えない世界

- 一 記憶と自覚
- 二 対話における象徴の役割
- 三 有限のうちなる無限
- 四 三人称の世界から二人称の世界へ

第五部 詩をもつこと

第一六章 暴力と詩—「人格と聖なるもの」、『イーリアス』あるいは力の詩篇」を手がかりに

- 一 「権利」の彼方の「正義」
- 二 殺人と「想像力」
- 三 「詩」が「力」を超えるとき

第一七章 美的判断力の可能性—シモーヌ・ヴェイユとハンナ・アーレント

- 一 「美しい」と判断される位相
- 二 共通感覚と天才
- 三 正義と美的判断

第一八章 暴力と愛

- 一 状況のなかの詩
- 二 善を欲望する魂の部分
- 三 『アンチゴネー』と現代
- 四 暴力を破壊する美と詩

第十九章 ケース・スタディ 5 映画「ガイサンシー（蓋山西）とその姉妹たち」をめぐって
—美しさという境涯

- 一 「見えない世界」と美しさ
- 二 リアリティと自由
- 三 暴力と詩

附論 日本におけるシモーヌ・ヴェイユの受容

- 一 日本でのシモーヌ・ヴェイユに関する三つの大きな潮流の紹介
- 二 シモーヌ・ヴェイユの思想と日本人—考えられる解釈とそのいくつかに孕まれる危険性

結びにかえて—ほとんど無、あるいは美

初出一覧

年譜

文献目録

註

2 本論文の概要

第一部「労働と詩」では、1934年、単純機械工として工場労働に携わったヴェイユが、その経験をもとに錬成していった労働の思想が論じられる。第一章では、後期の著作『前キリスト教的直観』および『ギリシアの泉』が参照され、ヴェイユがプラトン哲学に、万人が美を通じて神につながる可能性を読み込んでいたことが指摘される。苦しみの理由を空しく神に問う十字架上のキリストと同じく、単純労働のなかで必然の連鎖に捕われた労働者は、もはやいかなる慰めも見出せないとき、強い意味で「不幸」と呼ばれる段階に達する。想像力が活動を停止するとき、神の沈黙ははじめて神の超越の証として現れ、私の「欲望」は世界の彼方に向かうことで世界の美しさに触れる。目的なき合目的性というカントによる美の定義から出発しつつ、『ティマイオス』『パイドロス』『饗宴』『国家』などのプラトンの対話篇から、ヴェイユは必然を美として観想する愛の思想を引き出すのである。第二章では、工場労働に先立つ初期のデカルト論にヴ

ヴェイユ労働論の原型が探られる。『精神指導の規則』の一で設定される、日常生活のなかで悟性が意志に学ぶべきものを指定するという課題は、自己の意欲や信憑への同意を許さない労働の外的強制によって果たされる。『屈折光学』の盲人が杖によって直接事物に接するように、身体は労働によって精神が実在に接する道具となる。幾何学および代数学において想像力を純化するのには労働における「注意」であり、それが運動を媒介として図形や数列の観念を獲得させるのである。第三章では、「民衆は詩をパンとして必要とする」と述べるヴェイユが、「詩」という言葉で何を理解していたかが検討される。ヴェイユが貧困や悲惨に「詩」を見ると、そこには、「ほとんど無」であることによって、この世に不在の神の超越的実在に通じる極限的な美が看取されている。ヴェイユにとって人間的自由の本質を構成するのは、身体の中で苦痛が美に転換しうることであり、そのようなダイナミズムを引き起こすものを彼女は「詩」と呼んだのである。

第二部「美とは何か」では、ヴェイユの美の思想の神秘主義的側面が、近代の他の有力な美の思想との対比を通して検討される。第五章では、『判断力批判』におけるカントの美の規定を想起しつつ、美的経験の条件である没利害性のうちに、ヴェイユが倫理的契機を見ていたことが強調される。カントにおいては要請に留まっていた神が、ヴェイユにあっては、不幸のさなかにおける美との接触が恩寵の徴とされることによって、「徳」と「幸福」の絶対的一致を保証する存在論的意義をもって「待ち望まれる」ものとなる。カントが峻別した哲学と神学は、かくしてヴェイユにおいては重なり合うに至る。第六章では、ヴェイユの美の思想が、比較思想史的観点から、西田幾多郎の「場所的論理と宗教的世界観」と比較される。美を「直覚的真理」とみなして宗教と接続させるとき西田はヴェイユに接近し、十字架上のキリストが触れたとヴェイユが考える「真空」は西田の語る「絶対無」から遠くない。その一方で、西田が禅的な無我の境地から出発しつつも「自覚」の立場に留まるのに対し、ヴェイユが意志的な社会实践を通じて、逆説的にも、自己を消去して神がみずからを愛する場となす境地に達したことに、著者は「西洋」と「東洋」の思索の道の緊張をはらんだ交差を指摘する。第七章は、ヴェイユによる鈴木大拙『禅仏教論集』への参照と鈴木によるこの事実への言及を手がかりに、両者の思想が比較される。ヴェイユが「根こぎ」(déracinement)と呼ぶのは、悪の被害者が自ら周囲に悪を拡大し、さらにその跳ね返りを受けるというニヒリズムの連鎖である。それを解消しうるのは悪の破壊ではなく、悪のただなかにとどまりつつ純粋なものを渴望することである。ヴェイユの思想は、その点で、鈴木が語る煩悩を断つことなく涅槃に至る仏教的な「横超」の思想に通じ、そこに彼女のプラトン主義の「東洋」的とも言える側面が看取される。

第三部「善への欲望」では、ヴェイユの倫理思想の独自性が、後期のプラトン解釈およびキリスト教理解を通して考察される。第九章では、ヴェイユがスピノザと共有する直観知の重要性、必然性の強調が確認されるとともに、前者がプラトンからその着想を得た「宇宙の実体としての愛」は「神の愛の映し」であり、神自身は宇宙を超えている点で後者の汎神論と異なることが指摘される。ヴェイユが唱えるのは矛盾のマルクス主義的な解消ではなく、矛盾を矛盾のままとらえ、苛酷な必然性そのものを対象とするような愛の思想である。第一〇章では、創造によって被造物に存在を与えた神の自己放棄を、人間は労働において模倣していると考えたヴェイユの洞察が検討される。生前未発表の『カイエ』のうちで彼女が論じていた「脱創造」とは、人間が自律

を放棄し、父なる神と子なるキリストの愛の交換を遮断する幕を取り除く営みのことである。ヴェイユにとってはカントが感性の直観形式とみなした時間および空間は、労働による自我の破壊を通してはじめてアプリアリな形式となる。

第四部「藝術と倫理」では、ヴェイユの芸術論が集中的に取り上げられ、その倫理的次元が検討される。第一二章では、ヴェイユが提出した「神は至高の詩人である」という命題について、ここで言われる神とは詩人の意志や知性を超えた詩の源泉のことであり、詩人とこの源泉の関係は光合成を行う植物と光の関係に等しいという解釈が示される。善は表象不可能であるが美は善の「映し」であり、美の感情は神を表現する。他者の苦しみを観照しそれを美として表象しうる者が、ヴェイユにとっての天才なのである。第一三章では、芸術を「労働の象徴」と考えるヴェイユの洞察が、プラトン『饗宴』の愛の思想との関連で分析される。ソフォクレスに代表されるギリシア悲劇は、必然性に直面した人間の魂の自由を描き出し、悪の善への転回を開示する点で芸術の極致とみなされる。第一四章では、ヴェイユと西田の芸術論が対比され、前者が労働を芸術と不可分とみなしたのは、労働によって「想像的なもの」が還元されることで、芸術の源泉である「構想力」がはじめて開花すると考えたためであったことが主張される。

第五部「詩を持つこと」では、主としてギリシアの叙事詩と悲劇を参照しつつ、戦争の苛酷な現実に対してヴェイユが詩を対置したことの意味が考察される。第一六章では『イーリアス』あるいは力の詩篇』を手がかりに、ホメロスがギリシア人でありながらギリシアとトロイアの敵対関係を超越しえたのは、彼が戦争においては殺される側だけでなく殺す側も力に呪縛される必然性を深く理解していたためであることが主張される。また、イラク戦争を念頭に、帝国の支配者および一般兵士が、いかにして自己と他者の共存という必然を美として感じるに至りうるか、その可能性が検討される。第一七章では、カントの判断力論の政治的射程に注目したハンナ・アーレントとの比較を通して、ヴェイユの美の思想の政治性が再度検討される。両者のホメロス解釈の差異を踏まえつつ、著者は、ヴェイユにとってギリシアの詩人は、「不幸の可能性」に同意したがゆえに、自己と他者を分け隔てることなく、醜悪な戦争のうちに美を看取する「注意」を持ち得たと主張する。第一八章では、「民主主義」「人格主義」「権利」を否定するヴェイユ政治論の特異な性格が検討される。この思想の核心には狂気であることを恐れない愛の思想があり、その内実の解明が、ソフォクレスが造形したアンチゴネーの形象と重ね合わせて試みられる。

本論文では各部の最後に「ケーススタディー」と総称される映画論が置かれており、それぞれの作品がヴェイユ思想と通底する点が、彼女の著作を直接参照することなく論じられる。第四章では『男と女のいる舗道』(J=L・ゴダール)が取り上げられ、静止画像の瞬間性、発語の後の沈黙の時間性に注目しつつ、映像作家が作品のうちに自己を無化していく過程にヴェイユ思想との共通性が指摘される。第八章では『千と千尋の神隠し』(宮崎駿)が取り上げられ、主人公の少女の変貌のうちに、ヴェイユが語る「脱創造」を通して顕現する美の位相が指摘される。第一章では『ライフ・イズ・ビューティフル』(R・ベニーニ)が取り上げられ、ナチ収容所を舞台とするこの作品における「笑い」の質が、人間が虚無を直視するとき、世界を創造した神の「狂愚」を模倣するに至ると考えるヴェイユの洞察に即して考察される。第一五章では『アメリ・プーランの不思議な運命』(J=P・ジュネ)が取り上げられ、この作品の各登場人物がやがて自分

の殻を破り「三人称の世界」を「二人称の世界」に転化する過程が、ヴェイユが主張する「生の創造」による世界の美との接触の可能性に即して分析される。第十九章「ガイサンシー（蓋山西）とその姉妹たち」（班忠義）が取り上げられ、かつて日本軍の従軍慰安婦としての生を強いられた中国人女性の姿のうちに、過去のリアリティを変える可能性が、ヴェイユが強調した、どんな暴力もついに破壊しえない詩のありかが探られる。

「附論・日本におけるシモーヌ・ヴェイユの受容」では、加藤周一、鈴木大拙、片岡美智の三者によるヴェイユ思想の初期の評価のあり方が論じられるとともに、ヴェイユと西田幾多郎の思想との対比を通して、日本的な美意識にもとづいて彼女の思想に接近する場合に生じる得る危険な誤解の可能性など、ヴェイユ思想の受容にともなう諸問題が検討される。

「むすびにかえて」では、本論文の個々の論点が再確認されたうえで、このような理解を前提とするならば、貧困、戦争、殺人など、苛酷な現実への向き合い方は、ヴェイユの言葉に照射されることで、確実な着地点を見出しようという確信が述べられる。

3 本論文の成果と問題点

本論文の成果は第一に、ヴェイユの哲学思想を美および詩という切り口から検討しその構造を深く解明した点にある。ヴェイユ思想の哲学的、体系的解釈は先行研究においても主要な傾向ではなかったが、その美学的次元に着目し、労働、宗教、政治など他の諸次元との有機的連関を探索する作業はいつそうまれであり、この点で本論文は、国際的なヴェイユ研究に独自の重要な貢献を果たしたと言いうるであろう。

第二に本論文では、プラトンおよびデカルトのヴェイユによる受容と解釈の問題が詳細に検討されており、彼女の思想の哲学史上の位置づけに関する重要な成果を挙げたことが認められる。とりわけヴェイユが独自のキリスト教思想を投影してプラトンに読み込んだ諸論点には、思想家としての彼女の個性がその詩的な直観の深さにおいて集中的に表現されており、この側面を力強く描き出したことは本論文の大きな長所とみなしうるであろう。

本論文の成果の第三として、ヴェイユ思想と日本の思想家の関係について、主として西田幾太郎と鈴木大拙を取り上げつつ、斬新で興味深い比較思想論的分析を行ったことが挙げられる。これは著者がヴェイユ思想の日本における受容の問題に真剣に向き合っていることを示すものであり、本論文に外来思想の通常の学問的研究の枠を超えた、思想書としての迫力を添えている。

とはいえ、本論文には同時に、以下のような問題点があることも否定できない。第一に、著者の研究対象に対する距離がほとんど感じられず、独断的な論述に傾いている箇所が少なからず存在することである。このことと関連して、ヴェイユに関する先行研究について目配りが十分ではなく、ヴェイユのプラトン解釈についても、他の哲学者、研究者による解釈との比較などによって議論の幅を広げる努力はいささか乏しいと言わざるをえない。

また第二に、ヴェイユ思想の核心と著者が考えるものを、多様な角度から繰り返し論じ直す論述形式が取られているために、哲学史上の学説の参照などで反復的な記述が散見されることである。既発表論文を素材にまとめられた論文であることもその一因であろうが、細部の議論の整合

性については、もう少し行き届いた整理が施される必要があるだろう。

とはいえ、本論文が、外国思想研究の一般的傾向と次元を異にする情熱的な研究の所産としてきわめて注目すべきものであることに変わりはなく、上述の問題点はその長所のいわば裏面とみなしうる。以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。

最終試験結果要旨

2010年2月10日

受験者 今村 純子
最終試験委員 鶴飼哲 藤野寛 平子友長

2010年1月20日、学位請求論文提出者 今村純子氏の論文および関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「シモーヌ・ヴェイユの詩学」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、今村純子氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、今村純子氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。